The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の接触場面における他者開始修復とポライトネス
Author(s)	義永, 美央子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2007, 11, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第11号（2007）

日本語の接触場面における他者開始修復とポライトネス

義永　美央子*

要　旨

本稿では、日本語の接触場面における他者開始修復をポライトネスの観点から考察する。他者の発話に問題があることを指摘する他者開始修復は、人間関係構築における丁寧さ（politeness）の原則に背く行為でもある。本稿では、他者開始修復の遂行によって生じるフェイスの侵害を補償するためのポライトネス・ストラテジーについて論じる。また、他者開始修復そのものがポライトネス・ストラテジーとして機能するケースや、ポライトネス・ストラテジーを伴わない他者開始修復のケースについても検討する。

【キーワード】接触場面会話、他者開始修復、ポライトネス

1　はじめに

本稿の目的は、日本語の接触場面（ネウストプニー1995）で生じる他者開始修復を、ポライトネスの観点から考察することである（注1）。

２人以上の人々が顔をあわせて会話する対面的相互行為においては、言い間違いや理解のくい違い、特定の文脈における発話のずれなど、さまざまな問題が生じることがある。それらの問題が生じた場合、参与者は問題の存在を表示し、その解決を志向することによって会話の適切な進行を維持しなければならない。そのために用いられる会話上の装置の一つが修復（repair）である（Schegloff et al. 1977, Schegloff 1992）。

修復は、一般的に、問題源となる発話の産出に始まり、その問題を明示化し（修復の開始）、何らかの解決が志向される（修復の遂行）、という一連のシークエンスとして実現される。修復の開始と遂行を誰が行うかによって、修復のシークエンスは「自己開始自己修復」「自己開始他者修復」「他者開始自己修復」「他者開始他者修復」の４つに分けられる（図１）。

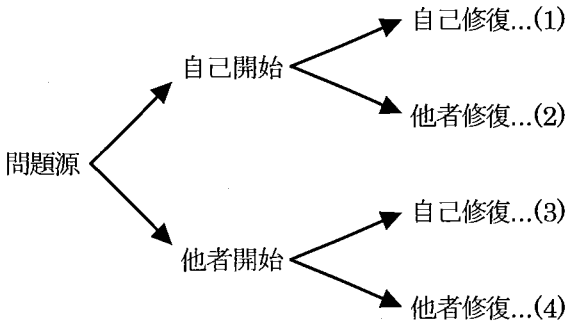

図１　修復シークエンス
（Schegloff et al. 1977、図は筆者作成）

以下の（１）から（４）はそれぞれのシークエンスの例である（文字化の方法については資料参照）。（１）の場合、いったん「大阪」と言った後で、語尾の長母音化と沈黙、「あ」という「『認識の主張』（とくに『いまわかった』ことの主張）を標示する（西阪2001：136）」談話標識を挟み、「関西（大学）」に言い直されている。

（１）自己開始自己修復の例　〔話題：日本の学費〕
878PF：そう、だからあの日本人は、大阪ー
(1.0) あ、関西大学へ行ける人は皆
879NK：お金持ち？{笑い}

* 大阪大学留学生センター助教授

880PF：お金持ち。{笑い}

（2）は自己開始他者修復の例である。TSは中国での結婚観が多様化していることを「ややこしくなる」と表現しようとしている。「ややこしい」という単語自体は思い出せたものの、その活用操作の段階で問題が生じ（352TS）、TSは上昇イントネーションによってUNに確認を求め、修復を開始している。それに基づき、UNは「ややこしく」という、現代日本語としては標準的な形式の発話を産出した（353UN）。続く354TSでは、UNはTSの発話を取り入れ、TS一人では成しえなかった発話「ややこしくなっています」の産出が可能になっている。

（2）自己開始他者修復の例〔話題：現代中国人の結婚観〕

352TS：（1）中国は、今は、すー、中国今ぬー、かい、結婚観はいろいろ、でも、えー、ややこしい？ややこ、く、ややこく？

353UN：や、や、ややこしく？

354TS：はい、ややこしくなっています。

355UN：うん。

なお、（1）が命題内容の訂正を行う修復であるのに対し、（2）は言語形式の産出に問題が生じたために行われた修復である。接触場面会話の場合、いわゆる母語場面会話と比較して、言語形式の問題を引き金とする修復が多く観察される。ただし、次にみる（3）のように、命題内容と言語形式には重複する部分も多く、両者を厳密に区別することは難しい。

（3）他者開始自己修復の例〔話題：中国の一人っ子政策〕

248PF：えー、ななー、97、8年からー、//生まれ、あのー、は、皆だいたい同じ、一人っ子です。

249JS：　　//うん。

250JS：（ふんふん）。97？

251PF：7、ななじゅう//ー、78年（から）。

252JS：　　//あ、77？

253JS：あー、あー、あー、あー。

（3）は他者開始自己修復の例である。1997か1998年以降に生まれた中国人は皆一人っ子、と述べるPFに対し、JSは「97？」とPFの発話をそのまま繰り返すことによって修復を開始した。それに応じ、PFは「1977、8年」と年代を修正している。

（4）は他者開始他者修復の例である。NKが中国で法律的に結婚が可能な年齢を尋ねているが、143PFでは「はたち」が誤って「はつか」と発せられた。続く145NKでは、この発話が訂正されている。

（4）他者開始他者修復の例〔話題：中国で結婚が法的に許される年齢〕

142NK：22歳から？

143PF：うーん、//男性、女性ははつか。

144NK：　　//遅いですね。

145NK：あー、二十歳〔はたち〕？

146PF：ああ、二十歳〔はたち〕、すいません。

これらのうち、問題源となる発話の聞き手が開始する修復（他者開始修復）は、問題源となる発話の産出者自身による自己開始修復に比べ、非優先的で好まれない（dispreferred）行為とされている。それは1つには、会話の構造上の理由による。すなわち、他者開始・他者修復の機会は問題源となる発話を含むターンの次に位置されるため、他者修復が開始される前に自己修復が遂行されている可能性が高い。

いま一つの理由として、発話の丁寧さ（ポライトネス：politeness）が挙げられる（Kasper and Ross 2001）。ポライトネスに関心をもつ研究者たちは、人間の言語使用のメカニズムを、人間関係の維持・円滑化の側面から考察してきた。Lakoff（1973）は、Grice（1967/75）の会話の協調の原理（the cooperative principle）を補完するものとして「丁寧であれ（Be polite）」という原理を主張した。また、Leech（1983）も同じくGriceの会話の協調の原理だけでは説明できない言語行動の原理として「ポライトネスの

原理（politeness principle）」を挙げ、その下位原則として「気配りの原則（tact maxim）」「寛容さの原則（generosity maxim）」「承認の原則（approbation maxim）」「謙譲の原則（modesty maxim）」「合意の原則（agreement maxim）」「共感の原則（sympathy maxim）」の６つを指摘している。

このようなポライトネス理論の延長線上に立ち、Brown and Levinson（1987）は、英語・ツェルタル語・タミル語の豊富な用例を挙げながら、言語使用における丁寧さの普遍性について考察を行っている。彼女らはGoffman（1967）の議論を敷衍し、人はみな、面子、すなわちフェイス（face）をもっていると主張した。人間のフェイスには二つの側面があるとされ、他者との協調と一致を重んじる面はポジティブ・フェイス、個人の独立自尊を重んじる面はネガティブ・フェイスと呼ばれている。また、これら２つのフェイスを守るために用いられる種々のストラテジーはポライトネス・ストラテジーと呼ばれ、ポライトネスのポジティブな面とネガティブな面のどちらを考慮するかによって、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに下位分類される。

また彼女らは、会話参与者のフェイスを脅かす可能性がある行為をFTA（face threatening act）と呼んでいる。例えば断る、批判する、話に割り込むといった行為がFTAの例である。対話者との調和を保ちたい合理的な主体としての話し手は、FTAを遂行することによってもたらされるフェイス侵害の度合いを見積もり、それに応じてFTAを補償するための種々のポライトネス・ストラテジーを選択する。図２はBrown and Levinson（1987: 60）に示されたポライトネス・ストラテジーの分類であるが、それぞれのストラテジーの番号（１～５）はフェイス侵害の可能性に対応している。すなわち、フェイス侵害の可能性が少ないと見積もられた場合はより番号の小さいストラテジーを、そして侵害の可能性が高い場合はより番号の大きいストラテジーが採用される（可能性が最大に見積もられた場合は、FTAが回避される）と考えられている。

Brown and Levinson（1987: 66）はFTAの一例として、相手のポジティブ・フェイスのある側面に対して否定的評価を下す、例えば「相手が間違っている、あるいは誤解していることを示す」ことを挙げている。対話者の発話に対して訂正や聞き返しを行い、問題があることを指摘する他者開始修復は、明らかにFTAの一つと位置づけられよう。

しかし、（一般的な母語場面の会話と比較して、相対的に）さまざまな問題が発生しやすい接触場面会話においては、参与者はしばしば他者開始修復を遂行しなければならない場面に遭遇する。そこで本稿では、他者開始修復というFTAに関わるポライトネス・ストラテジーに注目し、以下の２点から分析と考察を行う。

1）他者修復の遂行に伴い、会話参与者はどのようなポライトネス・ストラテジーを利用するか。
2）ポライトネス・ストラテジーを用いない直接的な他者修復が行われるとすれば、それはどのような理由によるのか。

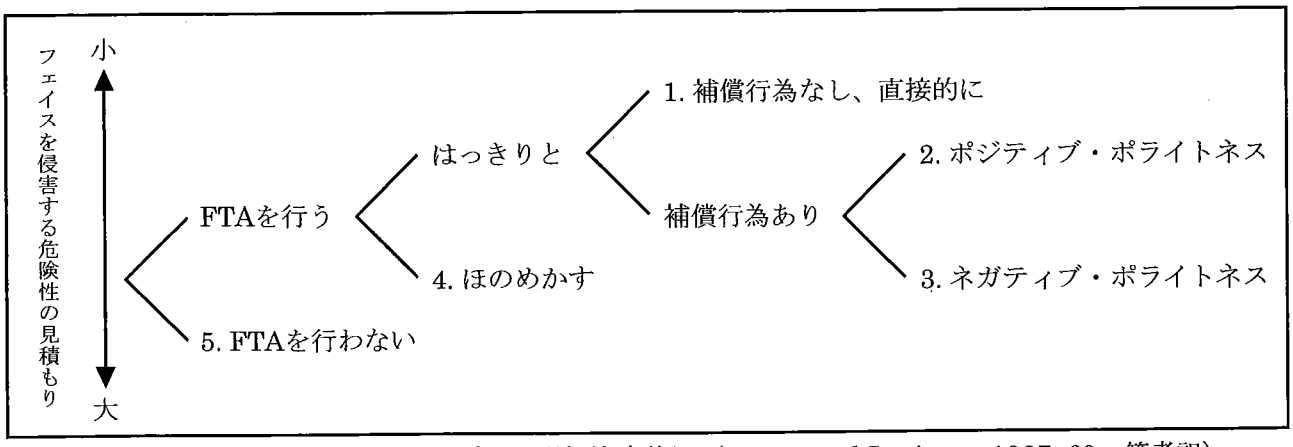

図２　ポライトネス・ストラテジーの選択決定状況（Brown and Levinson 1987: 60、筆者訳）

2　データ

本稿で用いるデータは、第二言語としての日本語話者（以下、NNS）による日本語母語話者（以下、NS）へのインタビューである。NNS（８名、詳細は表１参照）とNS（11名、詳細は表２参照）２人１組でのべ22組のペアになり、NNSの興味・関心に応じて、「結婚について」または「日本の若者について」をテーマとしたインタビューを行った。ペアになった２名はいずれも初対面、あるいはそれに近い関係で、調査前に親しく話した経験があるペアはなかった。

インタビューは、主にNNSがあらかじめ用意した質問にNSが答える形式で行われたが、インタビューの形式に特にこだわる必要はなく、NSから質問したり、逆にNNSが自分の意見や経験について述べてもかまわないと伝えている。インタビューの過程は全て録音し、また調査前に許可が得られたペアについては録画も行った。22ペアでの合計録音時間はおよそ12時間であった。会話終了後、データを文字化し、分析した。

仮名	性別	年齢	出身地	滞日期間※
PF	女	20代前半	中国	３ヶ月
SS	女	20代前半	タイ	３ヶ月
TA	女	20代後半	中国	８ヶ月
TS	女	20代後半	中国	１年２ヶ月
PB	女	30代前半	中国	３年
TT	女	30代前半	中国	５年
CK	女	20代後半	台湾	７年
TD	女	20代後半	タイ	10年

表１　調査協力者の属性（NNS）※滞日期間はいずれも調査時。

仮名	性別	年齢
ON	男	20代後半
UN	女	20代前半
LN	女	20代後半
JS	女	20代後半
ZD	男	20代後半
NK	女	20代後半
TN	女	30代後半
UP	男	20代後半
UO	女	20代後半
GD	女	20代後半
LZ	男	20代後半

表２　調査協力者の属性（NS）

3　他者開始修復とポライトネス

3-1 他者開始修復の回避

FTAとしての他者開始修復を分析する前に、まずそれが回避される状況をみておこう。相互行為の中に潜在する問題性は、その全てが顕在化し、修復の対象となるわけではない。分析者の視点からみれば明らかに問題が生じているにもかかわらず、相互行為の流れの中ではそれが顕在化されない場合や、いったんは顕在化された問題が十分に解決されないまま放置される場合もある。

（５）〔話題：理想の結婚生活〕

507TN：そうか。うん。でも、どんなふうな生活したいですか？

508TD：え？ふふふ。

509TN：独身？独身でしょ？

510TD：はい、そうですけど。やっぱり、普通がいいですね。

511TN：普通がいいですか。

512TD：うん、あんまり二人だけで、ま、仲のいい友達とか//家族だけでいいですけども、

513TN：　　//うんうんうん。

514TD：親はただ、ん、それが許さないよな、//思う。

515TN：　　//あー。

（５）では、TNが独身であるTDに結婚後にどんな生活がしたいかを尋ねているが、TDは「どんな結婚式がしたいか」を述べており、質問と応答との間に不一致が生じている。この問題を看過することは、正確な情報の交換という面からは決して望ましいものではない。しかし、情報の伝達のみが相互行為の目標というわけでもない。情報伝達と参与者間の関係調整という相互行為の二つの機能のうち、いずれが重視されるかは多分に状況依存的な問題である。例えば大学に提出する書類を記入するためにAという情報が求められているとすれば、その情報の追求・伝達は非常に重要な問題である。しかし（５）の場合、質問者は「TD

が望む結婚生活」という情報をどうしても欲していたとは考えにくい（注２）。というよりもむしろ、相手に関して質問することによって、相手に興味を持っていることを示していたのである。つまり、ここでの質問は会話を友好的に進行させるための一つの方策として尋ねられたものといえる。この場合、情報伝達になんらかの問題があったとしても、それをあえて顕在化させるのは参与者間の関係を友好に保つという当初の目的から見て得策ではなく、結果として問題はそのまま放置されたのである。

（６）の場合にも同じことがいえる。

（６）〔話題：LNが結婚した理由〕

70LN：ん、そんときはね、やっぱりうちの主人と、結婚したいと思ったのは、価値観？

71TS：がちが？

72LN：同じだった。

73TS：え、あ、あそう

TSは71TSにおいて、不完全な形で70LNを繰り返すことにより、発話の聞き取りもしくは理解に問題があることを示している。しかしLNはそれに答えないままTSの聞き返しでいったん中断されたターンを再度取得し、TSが聞き返した「価値観」には全く言及しないで発話を完成させた（72LN）。つまり、TSの問題は解決されないまま放置されているのである。しかしTSは続く発話73TSで「え、あ、あそう」と応じ、さらなる修復は開始しなかった。おそらく、このTSの応答は「価値観」に関する問題が解消された結果として生じたものではない。それよりも、修復のシークエンスをいたずらに延長することがもたらす経済性・関係性への悪影響を考慮し、問題にさらには言及しない回避のストラテジーをとったとみなすのが妥当であろう。

このような他者開始の回避は、FTAという観点からは、問題を顕在化することによるフェイスの侵害を防ぐためのポライトネス・ストラテジーと捉えられる。尾崎（2001）も指摘するように、ここで再度聞き返しを行うと、相手のフェイスを侵害するばかりか、「わからない」ことをさらけ出して話し手（他者開始の遂行者）自身のフェイスまでもが脅かされてしまう。他者開始の回避は、会話参与者双方のフェイスを守るために役立つのである。

しかし他者開始の回避が許されるのは、情報伝達上の問題がそれほど重大ではなく、放置しておくことが可能な場合に限られる。問題を解決し、必要な情報を得なければ相互行為が進行し得ない場合には、多少のフェイスの侵害には目をつぶってでも、問題解決のための努力をしなければならないときもあるだろう。ポライトネス理論は従来、人間関係を円滑にするための言語使用に着目してきたが、言語は言うまでもなく情報伝達の手段でもある。人間関係の保持と効率的な情報伝達という二つの側面のバランスをいかにとるかも、ポライトネス・ストラテジーの選択に関わってくるのではないだろうか。この問題については、４．考察でさらに検討する。

3-2 他者開始修復を補償するためのポライトネス・ストラテジー

3-2-1 不確実さを示す認識的スタンスとの共起

実際に遂行された他者開始修復を補償するためのストラテジーとして、まず、不確実さを示す認識的スタンス（epistemic stance）との共起があげられる。認識的スタンスとは、「ある関心事に対する知識や信念、知識の確実性、命題の正しさや知識の源へのコミットの程度、その他の認識的な性質を示す（Ochs 1996: 410）」とされ、話し手の感情を表す情意的スタンス（affective stance）と並び、スタンスの標示を通じて遂行される行為、行われている活動、発話者の社会的アイデンティティや参加者間の関係などのより複雑なコンテクスト情報を構成するといわれている。

今回のデータの中で、不確実な認識的スタンスを標示するために用いられた言語形式には、「～かな？」「たぶん」「と思う」などがある。（７）では、関西の代表料理を「とんかつ」というSSの発話（720SS）にTNが訂正を加えている。

（7）〔話題：関西の代表料理〕

718SS：関西の人は？関西の料理、代表の料理は、何ですか？

719TN：関西の代表料理、何（xxxx）何だと思う？大阪に住んでて？私よりよくわかるかもしれない。

720SS：とんか、とんかつです。

721TN：とんかつはでもたぶん全国じゃないかな？

721TNの発話を産出する段階で、「とんかつが（関西だけでなく）全国共通の料理であること」に、TNが不確実性を感じていたとは考えにくい。しかし、「相手の発話を訂正すること」は訂正する者とされる者との明らかな差（力関係）を顕在化するものであり、それを何の迷いもなく行うのは（教室談話のように、教える者・知っている者と教えられる者・知らざる者との役割関係が明確な状況を除いて）相手のフェイスを脅かす危険性が高い。そこで種々の言語形式やパラ言語的特徴によって不確実性を標示することが必要となる。

（7）の721TNで用いられた「～じゃないかな？」という言語形式は、Brown and Levinson（1987）がネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つとして指摘する「ヘッジ（hedge）」であるといえる。彼女らはヘッジを「ある述部や名詞句のもっともらしさを加減する助詞、単語、もしくは句（Brown and Levinson 1987: 145）」と定義した上で、R. Lakoffの説を引きながら、「発話行為の影響力を加減する」と述べている。この説に従うと、TNは「～じゃないかな」というヘッジを利用することによって、「（SSの）発話の訂正」という発話行為を和らげているといえるだろう。

次の（8）では、パラ言語的な特徴（上昇イントネーション）によって不確実性が標示されている。

（8）〔話題：来日すぐのTAが道に迷ったときの話〕

110TA：あー一人で、あー、あのこ、（ばっと）する？

111GD：あーぼうっと//する？

112TA：　　//あーぼっと//する

113GD：　　//うーん

Brown and Levinson（1987: 172）は、このような現象を「プロソディ的・動作的ヘッジ（prosodic and kinesic hedges）」と名付けているが、ツェルタル語の例が若干挙げられているのみで、詳細な記述や分析はなされていない。そこで、Goffmanが相互行為における参与者の役割について論じた「参与枠組（participation framework）」という概念（Goffman 1981）を援用して少し考えてみたい。Goffmanによると、通常「話し手」とされる人物の役割は、アニメーター（animator）、オーサー（author）、フィギュア（figure）、プリンシパル（principal）の４つに下位分類することができる。アニメーターとは物理的な発話の産出者、オーサーは使用される言語表現の選択者、フィギュアが発話の指示対象、プリンシパルは発話で示される考えや主張を持つ本人を指す。（8）での参与枠組を考えると、111GDにおけるアニメーターとオーサーは他者修復を行ったGDであるが、プリンシパルは問題源の産出者（TA）のままである。したがって、話し手がアニメーター、オーサー、プリンシパルという３つの役割を担う場合と比べ、不確実性が高いといえる。そして上昇イントネーションの使用は、不確実性を標示すると同時に、相手にターンを移行させることができる。したがって、他者修復をそれ自体で完結させることなく、相手に最終的な確認を委ねることになる。

このように、ヘッジを用いて不確実な認識的スタンスを標示することにより、自分の他者修復に対する責任を軽減する一方で、問題源となる発話のプリンシパルである対話者の自主的な意見や判断を尊重することが可能になる。したがって、ヘッジによる不確実な認識的スタンスの標示はネガティブ・ポライトネスのストラテジーとして機能しているといえるだろう。

3-2-2　独話的発話による問題表出

次に指摘できるのは、「どうかなあ」といった独話的発話による問題表出である。（9）では、「なんか、

ルールだか、みんなのものがちょっと形成してきたのか？」というCKの発話（65CK）に対し、「どうかなあ（69ZD）」、「あんのかなあ（71ZD）」という他者開始が行われている。

（9）〔話題：結婚による生活の変化〕

65CK：なんか、ルールだか、//みんなのものがちょっと形成してきたのか？

66ZD：　　//ルール？

67ZD：かなぁ。

68CK：うーん。

69ZD：あ、どうかなあ？

70CK：{笑い}

71ZD：あんのかなあ？

三牧（2000）は、初対面の日本人大学生ペアによる会話を分析し、独話的発話にはFTA補償ストラテジーとして機能するものがあることを指摘している。三牧（2000: 44）のいう「相手に直接向けると、FTAになる恐れのある内容を発話する場合に、相手に直接向けずに独話風に発話することによって、FTAを補償していると思われる用法」が、本稿で扱った接触場面会話のデータでも確認できた。

この現象を、先ほど紹介したGoffman（1981）の参与枠組を用いてもう少し考えてみよう。Goffmanの参与枠組では、話し手だけではなく、聞き手の下位分類も行っている。それによると、聞き手はまず、承認された聞き手と承認されない聞き手に二分される。承認されない聞き手とは、傍観者や偶然そこに居合わせた者、盗み聞きをする者といった、「自分（話し手）の話を聞いていること」を話し手が認識していない者を指す。それ以外の者、すなわち承認された聞き手は、さらに「直接話しかけられる聞き手」と「直接話しかけられない聞き手」に二分される。一般に、二者間の相互行為であれば、対話者はお互いを対話者（聞き手）として承認しており、また、発せられることばが対話者に向けて行われる。つまり、聞き手は「直接話しかけられる聞き手」としてのステイタスを有するのである。しかし（9）では、二者間の対面的相互行為でありながら、誰にも向けられないようデザインされた発話をあえて発することにより、対話者のステイタスを「直接話しかけない聞き手」に移行させている。それによって話し手は、問題表出があくまで自分の独り言にすぎず、相手に向けられているわけでも、相手からの何らかの働きかけを明示的に求めているわけでもないことを示しているのである。

3-2-3　一時的な同意

もう一つ指摘できるのは、修復の開始に同意を示す表現が先行する現象である。

（10）〔話題：TAの知人が話していた言葉〕

152GD：大阪弁でしたか？

153TA：うん、ほうじん語。ひょうじん、//ご

154GD：　　//うん。

　　=//標準語。

155TA：//ひょうじゅ、あ、標準語。

道に迷ったときに声をかけてくれた日本人について語るTAに対し、GDはその日本人が大阪弁で話していたかどうか尋ねている（152GD）。それに対し、TAは「標準語」と答えようとするのだが、「ほうじん語。ひょうじん、語」という非標準的な音声形式によって産出されている。TAが自らの発話の問題を認識していることは、自己修復の言い直しがおこっていることからも明らかだが、自力での標準的な音声形式の産出には至らなかった。続く154GDで、標準的な音声形式による他者開始他者修復が行われた後、最終的に155TA でこの修正を取り入れ、正しい形式で産出されている。

ここでは、154GDで他者開始他者修復が生じる際に、まず「うん」というあいづちが挿入されていることに注目したい。この「うん」は、152GDへの応答としてのTAの発話をいったんは承認したことを示している。Brown and Levinson（1987: 113）は、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つとして「名ばかりの同意（token agreement）」をあげている。「No」を言う前に「Yes, but...」をつけ、あか

らさまな不一致を回避するわけである。Brown and Levinson（1987）が論拠としたのは、Sacksによるアメリカ英語の調査（Sacks 1973）であるが、日本語でも同様の例が観察されたといえる。

3-3　ポライトネス・ストラテジーとして機能する他者開始修復

以上、修復の他者開始が回避される例、および、その遂行に伴ってポライトネス・ストラテジーが使用される例を見てきた。しかし、もう一つ指摘しておかなければならないのは、他者開始修復自体がポライトネス・ストラテジーとして機能する可能性もあるということだ。それは、質問に対する否定的な応答といった、非優先的な行為そのものの前置きとして修復が行われる場合である。質問・応答などの隣接対（adjacency pair）において、第１部分への応答としての第２部分になりえる発話の中には、優先的で好ましい（preferred）ものと非優先的で好ましくないもの（dispreferred）があることが指摘されている。Pomerantz（1984）は、隣接対の第１部分に対して同意や賛成を表す第２部分は近接して結びつけられ、構造的にも単純である一方、不同意や反対を示す第２部分は、産出の前に沈黙やうわべだけの同意、言いよどみなどを伴うことに注目した。すなわち、一般に優先的応答は無標であるのに対し、非優先的応答は何らかの前置きを必要とする有標の形式をとる。

（11）（12）は、非優先的応答の前置きとして他者開始修復が配置されている例である。（11）では「日本人の結婚観」を尋ねたいというTAに対し、UOはその発話意図を確認（10UO, 16UO）した後、「自分の考え方は他の（一般的な）日本人と違うかもしれない（からTAの期待する答えは与えられない）」と述べている（22UO, 24UO）。（12）の場合、SSは日本の若者について何が問題かを尋ねている。続いてTNは若者の範囲（ティーンエイジャー・大学生まで）を確認した（26TN・28TN）が、具体的な応答を保留したまま、同じ内容をSSに逆質問している（34TN）。

（11）〔話題：日本人の結婚観〕

9TA：インタビューの会、会話？会ー結婚。日本人の結婚観とは？
10UO：結婚観？
11TA：あー
12UO：あー// {笑い}
13TA：　　// {笑い}
14UO：うん。うん。うん。
15TA：うん
16UO：を聞きたい？
17TA：うんうん聞きたい。
18UO：ああ
19TA：いいですか {笑い}
20UO：わかりました。{笑い}
21TA：いいですか？
22UO：でも、私の結婚観はどうかなー？
普通、普通の日本人の、普通の感覚とはちょっと違うかもしれない。//うん。
23TA：　　//うん
24UO：普通の、何ていうか日本人が普通考えることと//ちょっと違うかもしれない。
25TA：//とはちょっと違う。うん。うん。
26TA：うーん大丈夫。//大丈夫。{笑い}
27UO：　　// {笑い}

（12）〔話題：日本の若者の問題〕

25SS：えと、TNさんは、にほんー、の（かもの）問題は、何に（xxx）ますか？え、今のー、問題。
26TN：あー、（xxx）そうねー、若者っていうって、ティーンエイジャー？//ぐらい？
27SS：　　//ティーンエイジ、はーい、ティーンエイジはー、うーん、だいかくせいまで。
28TN：大学生までー？
29SS：あーん。
30TN：なんだろーねー？
31SS：中学生からー、大学生までー、//（うーん、問題）。

32TN：　　//うーん、（若者の）問題？色々あると思うんですけどー、(5)（難しいです//ねー）。

33SS：　　//難しい//（xxx）

34TN：　　//｛笑い｝うーん、SSさん、どう思いますー？逆にー？

これらの例をみると、相手の発話の繰り返しや確認の形をとったこれらの他者開始修復は、文字通り「相手の発話の意図や内容を繰り返し、確認する」以上の機能を担っているように思われる。(11) の場合には相手の期待する回答を提示できないこと、(12) の場合には相手の質問に答えたくないこと（注３）、つまり何か「期待にそぐわない」行為の生じる可能性が、修復シークエンスの過程の中で予測可能になっているのである。

これまでにも指摘してきた通り、他者開始修復は相手の発話に何らかの問題があったことを示すため、FTA となる可能性が高い。しかし相手の期待に反する（と予想される）否定的な応答を直接的に行ったり、応答を拒否したりするダメージを考えれば、他者開始修復という社会文化的に利用可能なリソースは、応答の産出を遅らせると同時に、対話者にもその後の会話の展開を非明示的に予測させ、会話参与者相互のフェイスを守るために大きく貢献しているのである。

3-4　明示的否定による他者開始修復

ここまで、ポライトネスの観点から、他者開始の回避および他者開始修復に共起するポライトネス・ストラテジー、そして、他者開始修復自体がポライトネス・ストラテジーとして機能している例について考察してきた。しかしその一方で、ポライトネス・ストラテジーを伴わない直接的な他者開始修復が観察されることもある。非優先的なシークエンスである他者開始修復があえて実行に移されるのはどのような状況なのだろうか。本節ではまず具体例を挙げながら検討し、４章でさらに考察する。

3-4-1　複合型の修復シークエンス

第一に、複数の修復が重なる状況において直接的な他者開始修復が行われることがある。(13) では、内モンゴル自治区出身のTAが、外国を旅行することの難しさを述べている（136TA）が、今回の調査で初めてモンゴル出身者と接触したLZは、モンゴルの体制を十分に把握していない。LZは中国の一部とされる内モンゴル自治区と、独立国であるモンゴル共和国（外モンゴル）を混同していたようである（139LZ)。それに対し140TAでは「あ、外モンゴル？」という確認型の聞き返しが生じているが、LZはそれに直接答えず、さらに質問を重ねている（141LZ)。

しかし、141LZで用いられた「政権交代」ということばをTAは聞き取れず、今度はこれを問題源とする修復が開始されている（142TA, 144TA, 145TA)。つまり、TAの発した「モンゴル（内モンゴル・外モンゴル)」を問題源とする修復と、LZの発した「政権交代」を問題源とする修復が重なって生じているのである。

このような複合型の修復シークエンスは、問題が錯綜しているので、参与者にとって非常に負担の大きいやりとりといえる。問題解決自体に必要とされる労力が非常に大きいため、関係調整の側面まで十分に配慮することは難しく、146LZのような明示的な否定が行われたものと考えられる。

(13)〔話題：内モンゴル〕

136TA：内モンゴルの人、外国の旅行のこと？　//とても//難しい。

137LZ：//うん

138LZ：　　//うん

139LZ：それは、あの一国？国の体制が一、えっとー、じゅう、えっ？暫く前までは、あの、共産一主義だったんですっけ。モンゴル。

140TA：あ、外モンゴル？

141LZ：あれ？内、あれ、ご免なさい、全然知識がないんで。えーっと、政、政権交代かなんかしたんですか。

142TA：せ、せ

143LZ：せ、せ
144TA：せい（しょく／そく）？（xxx）
145TA：ああ、さいふ？
146LZ：いやっ、政権。{筆記}
147TA：ああ、このーああ、
148LZ：そ、そ、そ、そ
149TA：わかる。わかる。そう。たぶんたぶん。
たぶんその問題はあります。
150LZ：あまりー、そしたら海外に行くことはー？
難しい。
151TA：あー、そそそそ。
152TA：（3.2）そそそ。その問題はあります。
153LZ：うーん。

3-4-2　会話の話題

次に、話される話題が自分の領域に属するものであるかどうかも、修復のあり方に影響する。会話の話題と第二言語学習者の言語変異の問題を扱う理論に、談話領域モデル（discourse domain model）がある（Selinker and Douglas 1985）。談話領域とは、話し手にとって「関心があり、その価値を認めるとともに、それについての投資を惜しまない」話題（Whyte 1995）をさし、話題が同時期の同一人物の中間言語を変異させる一つの要因となりうる可能性が指摘されている。大平（1998）は談話領域モデルを用いて日本語学習者の他者修復の方法を分析し、領域トピックではより明示的・直接的な他者開始が行われることを明らかにしたが、今回の分析でもその傾向が確認された（注4）。

（14）（15）（16）はいずれも、参与者の母国・母文化・母語に関して示された誤解が、明示的に否定される例である。（14）ではNS、（15）（16）ではNNSが明示的否定を行っている。従来の考え方では、NNS が明示的否定を行うのは、目標言語文化での適切な否定の方法に習熟できていないためであり、NNS の社会言語能力（もしくは語用的能力）の不足を示すものと捉えられがちであった（中間言語語用論を中心としたこれらの議論のレビューは、Ellis（1994）、藤原（2005）に詳しい）。しかし、話題によってはNS、NNSに関わらず明示的に相手の発話を訂正することがある。またこのことは、同一人物の同時期の言語運用が常に一定のパフォーマンスを示すのではなく、話題や対話者といった状況的要因に大きく左右されることを示唆している。

（14）〔話題：結婚式での服装〕
336PB：ネクタイはあのー、白いですね。服は黒いですけど。
337UO：えっ？お葬式の時。
338PB：お葬式の//（XXX）
339UO：　　//お葬式の時は黒。
340PB：あっ、黒？
341UO：うん、ネクタイは絶対//黒。
342PB：　　//えっ、ネクタイは黒。

（15）〔話題：中国の少数民族の使用言語〕
517PF：うーん、たくさん、う、まあ、今、満族の言葉は、だんだんなくなるー、い、（3）う、今あのー、少数族の人はー、
518ZD：はいはい。
519PF：あのー、中国、標準語ー、勉強、//します。
520ZD：　　//え、北京語ってやつですか？
521PF：北京語じゃない{笑い}
522ZD：あー、標準語ってあるんですよねー？え、標準語とー、北京語は違いましたっけ？
523PF：ちがいますー。{笑い}

（16）〔話題：内モンゴルと外モンゴル〕
161LZ：で、その、外モンゴルと、内モンゴルって、どう{笑い}違うんですか。同じ国ですよね。
162TA：うそ。同じ国じゃないよ//。今私、中国人。中国中〔なか〕に内モンゴル人。
163LZ：　　//えっ？
164LZ：うん

3-4-3　能力や性格への言及

もう一つ、発話内容が参与者の能力や性格に関わる

場合にも、明示的否定が用いられる。まず、自分がほめられた場合には、それを直ちに否定する必要が生じる。(17) は、来日して１年２ヶ月が経ったというTTに対し、UOが日本語の上達について質問した場面である。TTはただちに質問そのものを否定している。

(17)〔話題：日本語の上達〕
75UO：上達された？
76TT：いえ、そ(ん)な、いえ、そなことじゃないよ。

一方、対話者が自分を卑下する発言をした場合にも、それは直ちに否定されなければならない。(18) では、自分は頭が悪いというTAの言葉を、GDが直ちに否定している。

(18)〔話題：頭のよさ〕
254TA：うーん。頭ー良くない（です）
256GD：え、そんなことないよー。
257TA：ほんとに？
258GD：そんなことないですよー。

(19) のように、笑いを伴うことによって、否定が和らげられることもある。

(19)〔話題：TAの日本語力〕
840TA：みんな、先生とインタビューします、インタビューして、いち、に、さん、五人？五人組？わたし、一番へた
841GD：いやいやいやそんな。{笑い}

(19) のGDによる笑いはおそらく、対話者であるTAへの共感を伝える機能を有していると考えられる。ただし、笑いをはじめとする非言語行動の解釈は幅が広く、場合によっては笑いが「軽蔑」や「嘲笑」と受け取られる可能性があることに注意が必要である。

4　考察

以上、ポライトネスの観点から接触場面会話における他者開始修復について検討してきた。これまでの分析をまとめると、修復開始可能箇所における聞き手の反応は、「問題を顕在化しない」「ポライトネス・ストラテジーと修復との共起」「明示的・直接的な修復の開始・遂行」の３つに大別できることが明らかになった。また、非優先的な応答の前置きとして、他者開始修復そのものがポライトネス・ストラテジーの機能を有する例も確認された。

これらの結果が示唆することを、「行為の決定要因」「NNSの言語運用能力」の２点から考察してみたい。

まず、修復の開始や遂行、および、ポライトネス・ストラテジーの利用・不利用は、いかにして決定されるのだろうか。Brown and Levinson (1987: 76) は、ポライトネスを規定する要因に関する議論の中で、以下のような公式を提示している。

$$Wx=D(S, H)+P(H,S)+Rx$$

Wx：行為xが相手のフェイスを脅かす度合い
D：話し手と聞き手の社会的距離（Social Distance）
P：聞き手の話し手に対する力（Power）
Rx：ある文化で、ある行為xが相手にかける負荷度

この公式に基づいて、ある行為xがフェイスを脅かす度合い（フェイス侵害度）を見積もった結果として、特定のストラテジーが選択される。具体的には、１章の図２に示したストラテジーの分類の中で、数字が小さいものほどフェイス侵害度の低い行為に用いられやすいという。すなわち、フェイス侵害度が最大に見積もられた場合にその行為は回避される。そして侵害度が比較的高い場合は非明示的ストラテジーが選択されやすく、フェイス侵害度が小さくなるにつれ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、この順に選択されやすくなるわけである。

この公式は確かに、ポライトネス・ストラテジーの選択という言語行動の社会的側面を示すよい枠組みである。ただ、フェイス侵害度の見積もりを、ストラテジー使用を規定する唯一の要因と考えることにはやや無理があるように思われる。例えば本研究で扱ったデー

タの分析は、情報伝達の重要性・効率性もストラテジーの選択に大きな役割を果たしていることを示唆している（注５）。

多くの修復は、命題内容や言語形式に関する問題をきっかけとして、それらの誤り（あるいは不適切さ）の訂正・修正を志向して行われる。つまり、会話の参与者間で正しい（あるいは適切な）情報を共有することを目指すものと考えられる。しかし、どのような問題についても常に修復が開始されるわけではない。特に相手の発話の問題を指摘する他者開始修復は、人間関係を円滑に保つという観点からは、極めて危険な行為である。したがって会話の参与者は、ある状況において自分が果たすべき役割や対話者との関係と、情報伝達とのバランスを考慮しながら、修復の開始の有無や方法を決定しなければならない。つまり、人間関係の保持が重視される一方で、情報伝達に関わる問題が相対的に小さい（と当事者が判断した）場合には、修復は回避される可能性が高い。これに対し、人間関係の保持と情報伝達の双方が重視された場合には、何らかのポライトネス・ストラテジーを伴った修復が開始される可能性が高くなる。また複数の問題が重なった場合のように、情報伝達の問題が非常に大きい時には、人間関係の側面まで十分に配慮することができず、直接的な修復が開始・遂行されることもある。

また、話題に対する話し手のコミットメントの度合いという要因もあげられる。会話参与者にとって非常に関心の高い話題や内容的に「知っている者」として振る舞うことが許される話題、あるいは、その問題について不適切な発言を許すことが難しいような、話し手のアイデンティティに関わる話題の場合には、ポライトネス・ストラテジーを伴わない直接的な修復が開始・遂行される。

このように、他者開始修復のあり方は情報伝達の重要性・効率性、参与者間の関係、参与者が会話の中で果たす役割、話題に対するコミットメントの度合いといった諸要因の関数として、談話の流れの中でダイナミックに決定されていく。言語哲学者であるGriceらの流れをくむBrown and Levinson（1987）の研究は、あくまで単文の例からの考察を行っていた。けれども実際のコミュニケーションにおけるダイナミクスを理解するためには、宇佐美（2001）も指摘するように、「談話のポライトネス」研究をさらに蓄積していくことが必要であろう。

次に、NNSの言語運用能力に関して、本稿の結果はどのような示唆を与えてくれるだろうか。従来の第二言語習得研究では、NNSによる直接的・明示的な修復の遂行は、目標言語能力（特に社会言語能力もしくは語用的能力）の不足を示すものと考えられていた。すなわち、「目標言語における適切な修復の方法を知らない・使えない」ことが原因だという認識である。しかし3-4の分析が示す通り、NNSが対話者であるNS よりも「知っている人」として振る舞うことが許される話題では、直接的・明示的な修復が「適切な」行為として承認される場合もある。つまり、ある行為の正しさ・適切さは、一般的な規則として存在するものではなく、具体的な文脈の中で、参与者自身の判断によって決定される。ある発話を切り取って、その正しさ・適切さを評価するのではなく、談話の大きな流れの中で当該の発話がどのように位置づけられ、機能しているのかを評価することが重要である。

5　おわりに

本稿では、日本語の接触場面会話における他者開始修復について、ポライトネスの観点から考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

１）接触場面会話の中に潜在する問題性は、その全てが顕在化し、修復の対象となるわけではない。また、他者修復の回避は、問題を顕在化することによるフェイスの侵害を防ぐためのポライトネス・ストラテジーであると考えられる。

２）実際に遂行された他者開始修復では、a）不確実さを示す認識的スタンスとの共起、b）独話的発話による問題表出、c）承認を示す発話との共起、といった方法により、他者開始修復によるフェイスの侵害を補償する試みが行われている。

３）質問に対する否定的な応答といった、非優先的な行為の前置きとなって、他者開始修復の遂行そのもの

がポライトネス・ストラテジーとして機能する場合もある。

4）ポライトネス・ストラテジーを使わない直接的な他者開始修復は、さまざまな問題が錯綜するシークエンスや、他者開始修復を遂行する人物の談話領域に関する話題、あるいは発話内容が参与者相互の能力や性格に関わる場合において多く観察される。

これらの結果は、NNSの目標言語能力についても再考を促すとともに、言語の伝達的側面のみならず、社会的側面、認知的側面もあわせて分析する談話研究の必要性を示唆するものである。今後は、具体的な状況における言語活動の包括的（holistic）な分析の蓄積が望まれる。

注

1．本稿は、筆者の博士学位論文（義永 2002）の一部に加筆・修正したものである。

2．これには、もちろん、今回のデータ収集状況の特性が大きく影響している。すなわち、今回はNNS が話題を設定しているとはいえ、調査者が設定した日時に初対面の相手とインタビューをするという意味で、「普通の」会話とはやや異なった状況にあることは否めない。今後、自然会話を含めたさまざまな状況でのデータ収集が必要であろう。

3．（12）の例ではさらに、TNはSSに同じ質問を投げ返す（34TN）によって、「答えること」を見事に回避していることに注意が必要である。

4．当初の談話領域モデルでの領域トピックは、大学院生や研究者の専門分野といった、かなりアカデミックかつ専門性の高い話題を指していた。しかし生活スタイル領域（lifestyle domain）という概念により、もう少し一般的な意味での「関心のある話題」も領域トピックに含まれる、との見方もある。ここで扱うような、自分の出身国やその文化・生活習慣等に関連する話題は、生活スタイル領域としての領域トピックとみなすことができる。

5．情報の効率性とポライトネスの問題については、「あからさまに言う（bald on record）」ことととの関連で、Brown and Levinson（1987：95）にも言及がある。しかし、単に「あからさまに言う」場面だけではなく、ポライトネス・ストラテジーの使用が伴う場面でも、情報の効率性は何らかの影響を及ぼすと考えられる。今後は「効率かポライトネスか」のような二者択一的な捉え方ではなく、ストラテジー使用が決定される過程および決定に影響する要因を、談話のダイナミクスの中で明らかにする研究が求められよう。

参考文献

Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness:Some Universals in Language Usage.* New York: Cambridge University Press.

Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition.* Oxford: Oxford University Press.

Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face to Face Behavior.* Garden City: New York.

_____. 1981. *Forms of Talk.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Grice, P. 1967. William James Lectures, Harvard University. (Published in part as "Logic in Conversation" in P. Cole. and J. L. Morgan. (eds.) 1975. *Syntax and Semantics.* Vol.3 (Speech Acts): 41-58).

Kasper, G. and S. Ross. 2001. "'Is drinking a hobby, I wonder': Other-initiated Repair in Oral Proficiency Interviews". Paper presented at the American Association of Applied Linguistics, St. Louis, Missouri, February 2001.

Lakoff, R. 1973. "The logic of politeness; or minding your P's and Q's". *Chicago Linguistic Society 8*: 292-305.

Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics.* London: Longman.

Ochs, E. 1996. "Linguistic Resources for Socializing Humanity". in Gumperz, J. and S. Levinson. (eds.), *Rethinking Linguistic Relativity.* Cambridge: Cambridge University Press.

Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/ Dispreferred Turn Shapes". in Atkinson, J. M. and J. C. Heritage. (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks, H. 1973. Lecture Notes. Summer Institute of Linguistics, Ann Arbor, Michigan.

Schegloff, E. A. 1992. "Repair after Next Turn: The Last Structually Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation". *American Journal of Sociology 97/5*: 1295-1345.

Schegloff, E. A., G. Jefferson, and H. Sacks. 1977. "The Preference for Self Correction in the Organization of Repair in Conversation". *Language 53*: 361-82.

Selinker, L. and D. Douglas. 1985. "Wrestling with 'Context' in Interlanguage Theory". *Applied Linguistics 6*: 190-204.

Whyte, S. 1995. "Specialist Knowledge and Interlanguage Development: A discourse Domain Approach to Text Construction". *Studies in Second Language Acquisition 17*: 153-83.

宇佐美まゆみ. 2001.「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4専門部会報告書. 9-58.

大平未央子. 1998.「話題による日本語学習者の修復行動の変異」『大阪大学言語文化学』Vol.7. 43-58.

尾崎明人. 2001.「接触場面における在日ブラジル人の『聞き返し』とその回避方略」『社会言語科学』4巻1号. 社会言語科学会. 81-90.

西阪仰. 2001.『心と行為』岩波書店.

ネウストプニー, J. V. 1995.『新しい日本語教育のために』大修館書店.

藤原智栄美. 2005.「社会文化の接面に立つ学習者を理解する」西口光一（編著）『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社. 144-165.

三牧陽子. 2000.「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『多文化社会と留学生交流』第4号. 大阪大学留学生センター. 37-53.

義永美央子. 2002.「相互行為のリソースとしての修復—日本語母語話者と非母語話者の接触場面における会話の分析から—」大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文.

資料　文字化の方法

1．表記は、漢字仮名交じりで行う。

2．文字化の前に、行番号と発話者のイニシャル（仮名）、コロンをつける。

3．基本的に、話者交代のところで改行する。

4．文字化の記号は、以下の通りである。

、　発話の区切り、ごく短い沈黙

。　発話の終了（下降イントネーション）

？　発話の終了（上昇イントネーション）

ー　音の引き延ばし

(1.2)　沈黙、ポーズ（括弧内は秒数）

{　}　非言語行動　例）{笑い}{首を横にふる}

//　同時発話（//後の発話が次の番号の発話と重なっている。）

=　発話が切れ目なく続いていることを示す。

〔　〕　直前の漢字語彙の実際の発音（複数の可能性がある語句の場合）

(　)　聞き取りにくい発話。可能性がある語句を( )内にいれる。複数の可能性がある場合は、/を挟んで列挙する。全く聞き取れない場合は、音節の数だけXを入れる。

太字　強調（ストレス）がおかれている箇所は太字にする。

下線　修復が行われている箇所など、特に注目すべき発話を示す。